

9月26日(土) 新型コロナウイルス感染対策のため、Zoomにて第32回メディカルカフェを開催しました。

メディカルカフェに初参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4回生 笹倉健嗣

私は今回初めてメディカルカフェに参加しました。どのようなことをするか説明では聞いていましたが、実際はどのようなのだろうか、そして対面でなく Web 形式で行われるといったことからとても緊張していました。しかし始めてみると、初対面のがん患者さんであるからといって何か特別なことなく様々な話を聞かせていただきました。

今回参加したグループでは血液がんを患っている方がいらっしゃいました。この方は「新型コロナウイルス感染症拡大防止期間中だからといって人混みを避けるようになったわけではなく、普段から多くの人がいる所には行かないようにしている。」と聞きました。私はこれまで授業で習ったことしか血液がんのことはわかりませんでした。しかし今回の話を聞いて自分が人混みを気にして外出できないつらい時期がありました。がん患者さんの中には普段からこのような生活を送られている方がいることを知って、がん患者さんが普段の日常生活においてこんなにも苦労されているのかと思いました。

また、がん患者さんの病室での闘病生活についても聞くことができました。がん患者さんは「抗がん剤の投与を受ける時、医療従事者たちが投与の準備をしている様子を見てこれから自分の身体に投与するものがどれだけきついものであるかといった不安を感じることもある。」とのことでした。そして「病室での闘病中、医師や看護師だけでなく薬剤師も気軽に挨拶だけでもいいので、病室に訪れてほしい。」とおっしゃっていました。私はこれまでがん患者さんに対してどのように接したらいいかわからず、一人の時間を設けることがよいのではないかと考えていました。しかし今回のメディカルカフェで「闘病中どうしても不安に感じることもあるから話を聞いてほしい。がん患者だからといって特別扱いせず普通に接してほしい。」といった意見を聞くことができ、がん患者さんに対する考え方が変わりました。

そして今回のメディカルカフェでは Web 形式といった特徴を生かして大分から参加された先生もいらっしゃいました。残念ながら今回は別グループだったので、お話は聞くことはできませんでした。しかし、再び参加される予定があると聞いたのでお話を聞きたいと思いました。また、Web 形式の利点である遠く離れた場所からでもお話を聞くことができることを生かして、神戸まで来ることが難しい方ともお話をし、授業だけでは難しい貴重な経験を積み、今後生かしていきたいと思いました。

患者と寄り添う大切さ

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 恵美良太

今回行われたメディカルカフェは、zoom を介した 2 回目のオンラインカフェでした。前回はファシリテーターを任せ、自分で話しつつ他の方に話題を振っていくという難しさを体験できましたが、今回は先生がファシリテーターをしてくださり落ち着いて話をしたり聞いたりできたとともに、今後ファシリテーターをやるにあたっての勉強にもなり、とても充実したカフェとなりました。

今回のカフェでは、新型コロナウイルスのことや災害のこと、また抗がん剤の話や薬剤師の今後の仕事内容など様々な話題が展開されとても学ぶことが多かったのですが、その中でも僕が 1 番心に残ったのが、入院する患者さんの気持ちという点です。病院によっては薬剤師が病室まで行き、服薬指導をするだけでなく日常的な話をしてメンタルケアをしている病院もあれば、薬剤師は病室まで一切こずに薬剤師の顔すら見ずにそのまま退院をする病院もあります。そう言った中で、どちらの方が患者にとって良いのかは言うまでもなく前者です。特に話はしなくても患者の側で寄り添ってあげるだけで患者さんは元気になると一緒にいた方からもお話をいただきました。これまで、僕は患者さんにどのような声かけや振る舞いをすれば 1 番元気になってもらえるかということを探索していましたが、このような話を聞いてなりより 1 番はその患者さんに寄り添ってあげることなんだと学ぶことができました。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4 回生 森山由理

今回は Zoom での開催となりました。私自身 Zoom は授業でしか使ったことがなかったので少し不安でしたが、特に問題もなく終わることができたので一安心しました。関西以外の方々ともお話しできるということはとても新鮮で、Zoom でカフェを開催する魅力の 1 つだなと感じました。

私のグループでは、コロナの自粛生活中のことやオンライン化のこと、自然災害における医療、これからの社会についてなど、本当に様々なテーマについて話し合いました。中でも印象に残ったのは、医療者に求めるものというテーマでした。入院中、薬をもらうときに顔を出してくれる薬剤師もいれば、顔を出さない薬剤師もいる。会いにきてくれたらホッとするし、自分の体調のことも話しやすいとおっしゃっていました。また、患者さんの体調が良さそうであれば薬を渡すときでなくても、気軽に話しに来てくれたら嬉しいとおっしゃっていました。

その言葉を聞いて、患者さんと直接会って話すことの大切さを改めて実感しましたし、自分から積極的に関わっていくことで患者さんとの関係性が変わってくるのだということにも気づかされました。それと同時に、どれだけ忙しくても患者さんを第一に考えられる薬剤師にならなければいけないなと思いました。私は来年病院実習に行きますが、そのときに今日感じたことを心に留めながら患者さんと接したいなと思います。

また、今回のカフェでは様々なテーマについて話し合ったからこそ気づいたことがありました。そ

次ページへ続く

それは、自分の意見を持ち、相手にしっかり伝えることの大切さです。薬剤師として実際に働き始めると、他職種の方や患者さんなどから意見を求められる機会が多くあると思います。他職種の方や患者さんなどから意見を求められたときに、知識不足や自信のなさから上手く答えられなかったら、「この人に任せて大丈夫なのだろうか」と不安な気持ちにさせてしまうと思います。患者さんやその家族、他職種の方々に不安にさせないためにも、正確な知識を幅広く身につけ、自信をもって答えられるようにならなければいけないなと思いました。私とその領域に達するにはまだまだ時間がかかってしまいそうですが、まずは目の前にある勉強や実習を「将来につながるもの」と意識して毎日を過ごしていきたいなと思います。

画面を通して双方向の思いを学んだ Zoom メディカルカフェ

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 渡邊理乃

今回の Zoom でのメディカルカフェには初めての参加でした。画面越しできちんとお話を聞くことができるか、自分が感じたことを画面を通して伝えることができるか不安でしたが、実際に始めてみると普段の対面でのメディカルカフェと大して変わらない雰囲気でお話したり聞くことができました。

グループ別の対話では、患者さんからの視線と医療者側からの視線と両方知ることができました。患者さんとしては、がんの治療法や副作用についてもっと気軽に相談できる場がほしい、外来で治療を続けるがん患者さんは院外処方になり、医師から処方箋をもらうだけなのでどこに相談すればいいのかわからないというお話を聞きました。また相談できる「場所」だけでなく、忙しいような医師に相談したらいいのか、院外薬局の薬剤師に聞いてもいいのかわからないという声もあり相談したくても場所がない、薬剤師に聞いていいのかわからないという言葉がとても印象に残っています。がんについて専門的に勉強したがん認定薬剤師もいますが、どの薬剤師に聞いたり相談してもきちんと応えられるような医療者になりたいと心から思いました。またちょっと自分の話を聞いてほしい、周りの人の意見やアドバイスを聞きたいなど情報を共有できる場所にこのメディカルカフェが選択肢に入ったらとても嬉しいとも思いました。そういう場所になれるように、今後も頑張っていこうと思いました。

一方で、いくら自分が患者さんに寄り添いたい、力になりたいと思っても患者さんがそれを望んでいなければただの押し付けになることも今日学ぶことができたので、「自分から発信しているアンテナに引っ掛けるのではなく、患者さんの発信するアンテナに引っ掛かる」、「患者さんから選ばれる薬剤師」になれるように患者さん一人ひとりときちんと向き合って今後の実務実習に活かしたいと思いました。

Zoomでのメディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4回生 徳田華歩

私は今回初めてZoomでメディカルカフェに参加させて頂きました。今まで対面で参加していたということもあって始まる前は少し不安でしたが、いつもと変わらない温かい雰囲気の中でお話をすることができました。

話していく中で「まだオープンにがんだと言えない世の中だ」という言葉が胸に刺さりました。がん患者さんは抗がん剤の副作用により髪の毛が抜けてしまったり、生活していくうえで様々な影響を受けます。仕事と両立していると中々自分から周りに言えず、逆に自分の殻の中にこもってしまい、どんどん悪い方向に進んでしまいます。そのような環境を今の社会が作り出していることに疑問を覚えました。

全国にあるメディカルカフェが患者さんにとってもその家族にとっても自分の想いを素直に発せられるような、どんな小さなことでも普段感じている不安を取り除けるような場がとても大切で、もっとそのような場が増えればいいなと改めて痛感しました。がん患者さんは“孤独”であり、それぞれが色々な不安を抱えています。

その中で身近な家族や私たちが心の支えとして寄り添っていくことが重要だと深く考えさせられました。又、参加された方で以前医療従事者として携わっていた方がいらっしゃったのですが、患者さんと向き合う際に医学的に自分の考えを押し付け、ただ正論を言うのではなく患者さんの想いを受け止め接することが何よりも大事だと仰っていました。

私は今後薬剤師になるうえで、ただ服薬指導を行い、薬を渡すという決められたことをするだけではなく、患者さんの想いを受け止め、自分には何ができるのか、本当に伝えたいことは何なのかと気持ちを汲み取る意識が必要であることを改めて感じ、将来患者さんに頼られるような薬剤師になりたいです。

これまでのお話以外でも外来でがんをサポートするにはどうしたらよいか、薬剤師外来があるけれど全ての病院で実施されているわけではなく限られているため増やしていくにはどうしたらよいか、がん専門薬剤師が増えていくには？など様々な議題に対して患者さんと医療従事者と私たち学生が色々な多方面から意見を共有することができ、自分が今から成すべきことを深く考えさせられるとても貴重で学びの時間でした。同じグループだった先輩方は実務実習を経てからの参加でした。私も実際の現場を見てから参加するとまた違った見え方や考え方で皆さんとお話をすることができると思ったので早く経験を積んでいきたいです。

どんな薬剤師になりたいか

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 園部愛梨

今回私が参加したグループは薬学生が多かったせいからか、病院薬剤師、薬局薬剤師がどんな役割をもてば患者さんの悩みを解決できるのかについて多く話した。結果として何か革新的な解決に繋がったかどうかは分からないけれど、少なくとも参加して意見交流できたことが薬局・病院実習を終えた身としては大変勉強になった。

話のメインとなった議題が外来で抗がん剤治療を行っている患者の不安を誰がフォローできるのかというところだ。

私は病院で実習した時に薬剤師外来という、抗がん剤治療を始める患者さんの副作用に対する不安を少しでも取り除けるように、また患者さん自身がその副作用に気付けるように積極的に薬剤師が介入する場所があった。そこで、患者さんのフォローができるが、現状対応できる患者さんが少ないことが問題であった。そこで、薬局薬剤師の役割が重要になってくると考えた。今回このカフェに参加したことで、患者さんの声を聞く事ができ、またそれによって薬剤師はどんなことができるのか、薬学生の時から「考える」ことができ今までのカフェより前進した気がした。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4 回生 北夏実

患者さんから選ばれたら相談に乗る。話してみる。けれど、これはそう簡単なことではなく、そのためにも日頃から常にアンテナを貼っておくべきであり、選ばれる人になるように日頃から頑張ることが大切であるという林先生の話は今回のメディカルカフェで 1 番心に残った言葉でした。目の前の患者さんに必要なことを自分だけで考えるのではなく、患者さんと共に考えたり、患者さん同士で考えてもらったりすることも大切なことだと思いました。特に 2 年前に乳がんを患われた水野さんの話を聞くと、患者さん同士で話すことはとても大切なことだなと思いました。当事者にしか分からないことだってあるし、当事者同士だからこそ話せることがあるものであるから、そこに口を挟むのはダメだよという林先生の話も聞き、すごく納得しました。私たち医療関係者はあくまでも話を聞くだけで、アドバイスなどはしないということを聞いた時は驚きましたが、本人が解決策や考えを見つけることが大事なんだということも聞き、なぜかすごく納得しました。そして、この話をしている時にもメディカルカフェがもっと多くの人に知れ渡ったら、1 人で抱え込んでいる人の手助けをできるのではないかと思います。私たちはその場を提供するだけかもしれないけれど、話を聞いてくれてありがとうとか私たちのことを少しでも考えてくれてありがとうと毎回出会う人が言ってくれます。これでいいのかな？って思っても、メディカルカフェに来てる方が満足そうにしてる姿を見てると安心します。

次ページへ続く

最近はコロナのこともあり、参加者さんが減っていますが、ある程度落ち着いた時には今まで以上の大勢の方に参加してもらえたら良いなと思いました。そのためにも今のこのコロナ期間に沢山の案を出し合うべきではないかなとも思いました。自分たちからもっと発信して行って、メディカルカフェをもっと広めるべきではないかなとも思いました。

水野さんの話を聞いていると、がん患者さんだけではなく、病を患っている方が気軽に行けるような場所を作ることで、もっと充実した治療もできるのではないなとも思ったので、頑張っ て発信していきたいです。そして水野さんみたいに仕事と並行しながらがん治療を行った人もいるという話も聞いて、もっと幅広い年代の方にも発信していくことにより、何か変わってきそうだなとも思いました。私のイメージではがん患者さんは仕事を休んでがん治療を進めているものだ と勝手に思っていたので、多くの方にも知ってもらいたいなとも思いました。しかし、私みたいに思っている方もいるだろうし、今まで大きな病気にかかったことのない方などからは、理解を得ることは難しいとも思いました。仕事や学校生活と並行しながら、もっと堂々と治療に取り組めるような社会になっていったら良いなとも思いました。なかなか現実からはかけ離れてるのかなとも思いましたが、もっと世の中の人にも他人事ではなく、自分のことのように考えてもらいたいなとも思ったので、考えることが多くな っていました。そして先輩たちの話を聞いている限り、そういうのは病院や薬局実習に行くことでたくさん知ることができたり、目の当たりにしたりすることで知識も増えていくのかなとも思いました。私たちが中学生の時にはがん教育みたいな授業は無かったので、時代にあった授業でとてもいいなとも思いました。少しでも考えてもらえるだけで、世の中もちょっとずつ変わっていき だろうし、治療に対しての引き目も少なくなるのでは無いかとも思いました。しかし、病気のことを周りに言うと変に気を使われるのも嫌だと言われる患者さんもいたので、難しいなとも思いました。

顧問：樋野興夫

塾頭：沼田千賀子

副塾頭：横山郁子

塾生：園部愛梨、恵美良太、渡邊理乃、北夏実、徳田華歩、笹倉健嗣、森山由理